

# 鹿児島県立図書館奄美分館における出版活動

## — 島尾敏雄と当田真延の業務に注目して —

工藤 邦彦

### 【要 旨】

鹿児島県立図書館奄美分館長で作家の島尾敏雄と当田真延分館長補佐が業務として行った出版活動を1958（昭和33）年度から1988（昭和63）年度までに発刊した定期行物をもとに考察した。その結果、島尾と当田による“配る出版”が図書館利用者との交流を深め、住民の学術研究や生涯学習の機会を担保するコミュニティを創成し、地域メディアとしての役割を担っていたことが明らかになった。

### 【キーワード】

鹿児島県立図書館奄美分館 出版活動 島尾敏雄 当田真延 地域メディア

### はじめに

我が国は1950（昭和25）年に図書館法が制定されたが、当時の公共図書館（以下、図書館と記す。）では、読書普及運動や郷土資料の収集・保存および都市部での学生・生徒等の席貸しといった館内利用が主であった。その後の1960年代初頭から80年代にかけ、中小図書館においては市民の読書施設として日常的に資料を提供する館外貸出の定着が図られ、それまでの館内の空間性を否定することでサービスの著しい発展がみられた<sup>1)</sup>。この飛躍的な発展に比して、1950年代を起点とする図書館活動の実践に対する検証は充分とはいえない<sup>2)</sup>。そこで、本稿ではこの時代に地方文化の向上を目指し行われた出版活動に注視する。

図書館における出版活動の中心となるのが販売を目的としない“配る出版”である。そのなかでも図書館報の発刊の歴史は古く大正期に創刊した図書館も多い。これらの多くは図書館の利用者向けというよりも、運営にあたる管理者等への報告を意図した根拠資料として作成した感がある<sup>3)</sup>。現在の図書館報は、図書館界に向けて発せられた事業の報告、住民に向けた新刊図書のご案内、図書館利用の普及を念頭に置いた記事内容等が主流といえる。一方で、図書館報の枠にとどまらないフリーペーパーをはじめとする多様な“配る出版”が耳目を集めている<sup>4)</sup>。武田（2019）は、図書館による出版活動を①住民が投稿する文芸誌・地方史研究雑誌、②所蔵する特別コレクションを紹介する小冊子、③YA（ヤングアダルト世代）が参加する読書活動推進を目的とした出版物、④地域情報の収集・発信や住民との連携に関わる刊行物とに分けた<sup>5)</sup>。

なかでも①は地方の図書館の該当事例が多く、鹿児島県本土については4つの図書館の定期刊

行物を挙げている<sup>6)</sup>。いずれも発刊を重ねた歴史ある“配る出版”であるが、地域特性を活かした定期行物の発刊は、同じ鹿児島県の島嶼部である奄美<sup>7)</sup>でも見られた。なかでも鹿児島県立図書館奄美分館（現在の鹿児島県立奄美図書館。以下、奄美分館および奄美図書館と記す。）では、1950年代から70年代にかけて後述のとおり多くの定期行物を発刊した。そこには、九州における図書館運営を先導した人物のひとりである島尾敏雄奄美分館長（以下、島尾と記す。）の存在があった。

島尾敏雄（しまお・としお）

1917（大正6）年生まれ

分館長在任期間（奄美日米文化会館長含む）：1957（昭和32）年12月～1975（昭和50）年4月

1955（昭和30）年10月 奄美大島名瀬市転居

1957（昭和32）年12月 鹿児島県職員入職、奄美日米文化会館長就任

1958（昭和33）年1月 奄美郷土研究会を組織、世話人となる

1958（昭和33）年4月 奄美分館長就任（奄美日米文化会館長兼務）

1975（昭和50）年4月 奄美分館長退任、県職員退職後に指宿市転居

出典：奄美分館1993.『島尾敏雄年譜』p4～8

加えて、島尾の業務を支えたのが当田真延奄美分館長補佐（以下、当田と記す。）である。彼もまた奄美分館の出版活動を担った人物であった。

当田真延（とうだ・みちのぶ）

1922（大正11）年生まれ

1942（昭和17）年大島中学校卒業

中央大学、琉球大学に学び、奄美群島政府、琉球政府奄美地方庁勤務を経て、

1951（昭和26）年7月 鹿児島県入職（大島支庁勤務、奄美日米文化会館配属）

1958（昭和33）年4月 組織再編で奄美分館に異動、主事として分館長補佐就任

1981（昭和56）年7月 分館長心得をもって奄美分館離任

県退職後、『龍郷町誌』執筆委員を務め、地元紙に評論を寄稿するなど創作活動を続けた

出典：栄喜久元、当田真延1980.『ふるさとの思い出写真集明治大正昭和名瀬』国書刊行会.

本稿では、奄美分館において島尾と当田による“配る出版”に該当する定期行物の発刊状況から詳細を確認する。研究方法は文献調査とする<sup>8)</sup>。具体的には、刊行物に掲載された記事と奄美図書館が所蔵している島尾が遺した日記の複写物（以下、「島尾日記」と記す。）を用いる。

## 1. 奄美分館の“配る出版”

島尾の出版活動の嚆矢とも言うべき、幼少期の小冊子制作の一端を示す。以下から早くに島尾は編集者としての才覚を持っていたことがわかる。

「1925（大正14）年、島尾8歳のとき、「謄写版や片仮名のゴム活字で、ひとりで定期的な小冊子を印刷、「小兵士」（全13号）その他を、小学校3年から県立第一神戸商業時代にかけて、55冊こしらえた」

出典：島尾ミホ、志村有弘2000.『島尾敏雄事典』勉誠出版. p466

「とりわけ関心を呼んだのが、文学や絵を印刷して複製することであった。出版印刷という行為が、幼い私のところをとらえて放さず、ひとつの秘儀のようにそれに従いたいと思った」「雑誌づくりはいよいよ本格化した。昭和6年からは新たに『少年研究』を編集発行した。」

出典：島尾敏雄1995.『島尾敏雄』（新潮日本文学アルバム）新潮社. p10, 16

島尾の編集における技量は、齢を重ねて奄美分館長としての職務においてさらに磨きがかかり、さまざまな“配る出版”に力を注いだ。1950年代以降、本館にあたる鹿児島県立図書館長の久保田彦穂（文学者の椋鳩十）の指示で奄美分館は「貸出図書館」、「参考図書館」、「保存図書館」としての役割を担うよう期待されていた<sup>9)</sup>。島尾は1958（昭和33）年4月の奄美分館開館を機に事業の計画を示したが<sup>10)</sup>、具体的には、以下の8点を挙げた<sup>11)</sup>。

#### 「奄美分館の事業」

- ①奄美群島日本復帰資料整備
- ②郷土資料の収集整備（琉球弧資料を含む）
- ③資料の刊行（「奄美資料」「島の根」「一年のあゆみ」「要覧」、書誌目録）（下線部引用者）
- ④研修会等の実施（図書館実務研修会、奄美地区読書普及研究会）
- ⑤読書運動（親子読書、緑陰読書、「朝読み・夕読み」、本を利用するグループの育成）
- ⑥貸出文庫
- ⑦蔵書構築
- ⑧奄美地区の図書館建設への支援

出典：鹿児島県立図書館1990.『鹿児島県立図書館史』p93～94

本稿では、③資料の刊行に該当する“配る出版”の詳細を確認していく。奄美の戦後を顧みると、敗戦で米軍統治下に置かれたその間、住民の総意であった日本復帰運動が激化し、精神的にも経済的にも苦しい状況に陥った。その反動で住民主体の文化活動や芸能は活況を呈し、復帰の前後には多くの日刊紙や雑誌が創刊され、新しい民謡や詩が誕生した。このような当時の文芸活動は、“奄美ルネサンス”と呼ばれ、奄美の人々のエネルギーが沸騰した時期であった<sup>12)</sup>。

間（2003b）は、“奄美ルネサンス”の時期を“雑誌の時代”と位置づけ<sup>13)</sup>、その時期に発刊された代表的な雑誌として、あかつち会が創刊した会誌『あかつち』を挙げた。あかつち会は、1946（昭和21）年2月末、当田宅に大島中学校22期の卒業生10人程が集まり結成した。会の活動は会誌の発刊をはじめ、講演会、女性講座、討論会、文化講座、レコードコンサートと多岐にわたった。『あかつち』の創刊は、1947（昭和22）年で名瀬に本社を置く南海日日新聞社で50部印刷した。しかし、活動期間は短く1948（昭和23）年7月に解散した。解散後の10月に第4号を発刊し活動を終えた<sup>14)</sup>。あかつち会の創設に参画した当田は、のちに島尾とともに奄美分館で図書館運営に従事することになる。

当時は『あかつち』のほか、教職員組合、連合青年団や官公庁等から多くの定期刊行物が発刊された。なかでも『自由』（自由社刊）は、“奄美の日本復帰の父”である泉芳朗<sup>15)</sup>が1949（昭和24）年から編集に加わり、その2年後の1951（昭和26）年に泉が奄美大島日本復帰協議会の議長になったことで機関誌的存在となった。奄美図書館所蔵の『自由』の表紙には、安陵図書館（後

の大島高等学校図書館)や奄美琉米文化会館などの蔵書印が確認できるため、島尾が意図的に定期行物を受け入れたと考えられる<sup>16)</sup>。間(2003b)のいう“雑誌の時代”に該当する定期行物のうち、奄美図書館に原本が現存する雑誌は少なくとも以下の7誌である。創刊順に列挙する(全て廃刊)。

- ①『自由』 1948(昭和23)年2月～1954(昭和29)年1月
- ②『週刊奄美』 1955(昭和30)年11月～1956(昭和31)年7月
- ③『週刊新奄美』 1957(昭和32)年8月～1958(昭和33)年1月
- ④『旬刊奄美界』 1962(昭和37)年1月～1963(昭和38)年9月
- ⑤『月刊奄美』 1963(昭和38)年10月～1966(昭和41)年12月
- ⑥『月刊あまみ大島』 1967(昭和42)年1月～1971(昭和46)年12月
- ⑦『月刊奄美の島々』 1972(昭和47)年11月～1988(昭和63)年11月

出典：奄美図書館郷土コーナー企画展「郷土誌で振り返る『昭和の奄美』」パンフレット

①から⑦は、いわゆる地域メディアと呼ぶべき定期行物であるが、その全容について金山(2008)と加藤、寺岡(2017)は実地調査に基づき詳細を明らかにした。とくに米国占領下にあった奄美の日本復帰運動を牽引した機関誌や自治体広報誌発刊の動向に触れ、それらは集落の住民同士をつなぐ情報誌と位置付けた<sup>17)18)</sup>。

また、金山(2008)は、奄美における自費出版または零細の出版社が発刊した書籍や雑誌の多彩さを他地域には無い特異な現象と示したうえで、それらは発刊部数が僅少で地元でも入手しづらい傾向にあると指摘した<sup>19)</sup>。また、このような特徴をもつ奄美の地域メディアについて加藤、寺岡(2017)は、そのジャンルを印刷系、音声系、映像系、音楽系、ネット系の5つの系統に分け、さらに印刷系については、新聞、タウン雑誌・印刷物、出版社の発刊物、行政広報物の4つに細分した<sup>20)</sup>。図書館の定期行物は、雑誌メディアや新聞メディアの範疇ではないとの見解から区分の対象にはしていないが、広義の行政広報物でもあり、かつ各々の図書館で選書、受け入れているタウン雑誌・印刷物、出版社の発刊物と同種と捉えることができる。このような出版状況の背景には“奄美の人が本を出し、奄美の人が読むという自産自消の土壌”があり<sup>21)</sup>、後述する奄美分館による“配る出版”が成立したものと考えられよう。

以上の背景をふまえ本稿では、島尾と当田が発刊に関わった以下の定期行物3誌<sup>22)</sup>を考察する。具体的には、奄美分館報である『島の根』を取り上げる。つぎに、奄美分館が育成してきた文化グループによる定期行物として、島尾と社会教育団体である奄美郷土研究会の関わりから誕生した機関誌『奄美郷土研究会報』(以下、『会報』と記す。)、最後に島尾が創設した読書会「島にて」(以下、「島にて」と記す。)の会員が寄稿、当田が編集し奄美分館にて発刊した読書会誌『島にて』を確認する。次章から3誌の発刊経緯や掲載された記事の内容を披瀝し論を進める。

## 2. 奄美分館報『島の根』

奄美分館における図書館サービスの周知を図る目的として、島尾の発案で創刊した定期行物が『島の根』である。

『島の根』(奄美分館報)

創刊：1966(昭和41)年11月20日

発刊頻度：年1回（1968、1972年は年2回発刊。1974、1975年は発刊なし。）

発行所：奄美分館（現在は後継館である奄美図書館が発刊。2022（令和4）年3月現在、最新号は58号：令和3年度。）

『島の根』は、島尾が奄美分館長に就いた1958（昭和33）年4月から8年の歳月を経て創刊した。1951（昭和26）年4月、前身にあたる米国占領下に設置した大島情報会館以来の狭小な施設から1964（昭和39）年、鉄筋コンクリート2階建ての図書館専用の新館への移設を果たした。また、島尾は家族とともに翌年の1965（昭和40）年、奄美分館に隣接した新築の分館長専用住宅に転居し、新たな気持ちで図書館業務や執筆活動に取り組んでいたと思われる。このような時期に島尾は刊行物の発刊を企図したのである。



写真1  
分館長室で使用した島尾の机（奄美図書館1階展示）  
（2017年11月12日筆者撮影）



写真2  
執筆活動を行った分館長住宅の書斎  
（奄美図書館1階で再現）（2017年11月12日筆者撮影）

島尾は、『島の根』を創刊するにあたり、巻頭言で住民に向けて以下のメッセージを発した。

「奄美分館が設置されて以来、ずっと私たち職員は、利用者の方々との結びつきのためのニュースのことを考えていましたが、いろいろの都合（下線部引用者）で今日まで実現できませんでした。このたび驚馬に鞭うってようやくこのようなものをこしらえました。これによって私たちは、図書館と地域の利用者との出会いと話し合いの広場にしたいと思っています。」

出典：『島の根』第1号（1966（昭和41）年11月20日発刊）p1

いろいろの都合とは、前述した奄美分館の移設と推察される。移設から2年余りが経過し職員態勢も盤石となり、貸出文庫事業も軌道に乗って新たな活動に踏み入れる時期であったことは想像に難くない。島尾の意図で編集は実務経験を積ますため、総務係の若手職員に委ねた。創刊号から第4号まで編集に携わった職員の手記をみる。

「利用者との結びつきのため奄美分館の広報誌を創ろう」となったときに、その任を先生は私に与えてくれた。ガリ版刷りのB5判4ページで、先生は創刊号で「これによって私たちは、図書館と地域の利用者との出会いと話し合いの広場にしたい」と語っています。私は昭和43年7月に奄美分館を転出するまで、第4号まで担当し、島尾先生のもと、集稿から編

集後記、ガリ版刷り作成までの一切に携わったことは、職務とはいえ肌違いで未経験であった私にとっては貴重な経験でした。」

出典：東秀吉2005. 島尾先生の思い出.

奄美・島尾敏雄研究会『追想島尾敏雄：奄美沖繩鹿児島』南方新社. p141～143

以下、島尾が発刊に関わった『島の根』の掲載記事<sup>23)</sup>から、特徴となる4つの項目を挙げる。

### (1) 図書館サービスの概要説明

創刊号では、全ての住民にサービスが浸透する題目として「奄美における図書館サービス」を掲げ、“図書館利用案内誌”を標榜した。「ゆくゆくは地域図書館への発展を目指してサービス活動をすすめるなければならない」<sup>24)</sup>という目的のもと、これまでの貸出文庫事業を発展的解消、奄美の市町村に図書館を設置することを視野に入れ、サービス内容の周知を図った。さらに、住民からの事実探査や文献調査といったレファレンス質問の回答に答えるべく、レファレンスサービスの概要について紹介した。

「レファレンスサービスという一般にはまだ耳慣れない仕事があります。(中略)それは人々の疑問点を図書館が、解答あるいはその糸口を与える仕事です。口述・電話または文書などでよせられる質問について簡単なことがらは図書館員が図書館の資料を使って答えまたは資料を提示しますが、専門的なことがらになりますと、最も適切な図書資料あるいはその道の専門家を紹介します。」

出典：『島の根』第1号(1966(昭和41)年11月20日発刊) p2

“レファレンス”という専門用語を使いつつも、住民の調査研究に資する新たな「参考図書館」としての役割を伝えることに力を注いだのである。

### (2) 「奄美分館の歴史」の公表

島尾は、前身の大島文化情報会館から引き継がれた事務文書を整理し、戦後における「奄美分館の歴史」に関する特集記事を連載した。この記事は、島尾が編んだ『県立図書館奄美分館史稿』(1964(昭和39)年3月奄美分館事務資料。以下、『史稿』と記す。)の記述に基づいている。

「奄美分館の歴史」掲載号(巻号)および内容細目(掲載年)

- ・第7号(1)：昭和23～28年
- ・第8号(2)：昭和28～29年
- ・第10号(3)：昭和29～30年
- ・第11号(4)：昭和31～33年
- ・第12号(5)：昭和34～35年
- ・第13号(6)：昭和36～38年

「奄美分館の歴史」は、第7号の1970(昭和45)年の発刊から第13号の1977(昭和52)年まで7年にもわたる長期の連載となった。『史稿』から引用したこの連載記事は、我が国の戦後における単館史を知るうえでも重要な文献といえる。

### (3) 奄美分館職員の司書・司書補資格取得：別府大学司書・司書補講習との関わり

鹿児島県職員として任用の奄美分館職員の多くが、入職時には司書・司書補資格を有していなかった。島尾が1958(昭和33)年7月から8月にかけて熊本商科大学で開講された司書講習を受講

し司書資格を取得したことを先例に、夏季に開催していた別府大学司書・司書補講習へ職員を毎年1名派遣した。

1965（昭和40）年夏季に派遣された当田は創刊号に「別府生活断章（司書補講習の想いで）」と題し、受講者と寝食を共にした鉄輪での宿舍生活を記した<sup>25)</sup>。また、当時別府大学附属図書館に勤務していた加藤一英（以下、加藤と記す。）は、昭和43（1968）年3月3日、名瀬で開講した図書館職員実務研修会講師として奄美分館に招かれ鳥尾との面会を果たした。その時の様子は、第4号の巻頭言に記載があり、加藤が当田や『島の根』の編集担当で司書補講習を受講した職員との再会を祝した内容となっている<sup>26)</sup>。

「PR紙としての『島の根』等が着実に発行され、一般に配布されていることにも注目したい。こうした不断の努力は、必ずや成果として結実するであろう。またそれを祈ってやまないのだ。」

出典：加藤一英1968. 名瀬図書館訪問記。

『島の根』第4号（1968（昭和43）年6月6日発刊）p1

加藤の訪問以降、別府大学司書・司書補講習と奄美分館職員との交流は続いていく。1978（昭和53）年3月発刊の第14号では、当時『島の根』の編集を担当していた職員の鉄輪から奄美分館の同僚への近況報告である「司書講習通信：別府大学から」を掲載した<sup>27)</sup>。

#### （4）住民からの声

“出会いと話し合いの場”という創刊当初の目的を果たすため、利用者からの投稿を積極的に掲載した。例えば、第3号では高校卒業後、浪人中に大学受験の勉強場所として奄美分館の閲覧室に通った息子の父親から、志望校の合格通知が届いたことへの感謝を綴った「図書館への道」を掲載した<sup>28)</sup>。また、奄美分館で図書館実習を行った大学生の所感、沖永良部島から修学旅行で奄美分館を訪問した小学校6年生のグループによる感謝文などを掲載した。このような奄美分館に寄せられた住民からの声を多数掲載したことで『島の根』は、徐々に住民との“交流誌”として定着していった。

### 3. 機関誌『奄美郷土研究会報』

本章では、奄美郷土研究会の機関誌である『会報』を取り上げる。会の歴史的な経緯を辿ると、1956（昭和31）年、奄美日米文化会館長の文英吉、郷土史家の大山麟五郎、田畑英勝、平和人、事務担当の鳥尾の5名で奄美史談会を発足、文が会長に就いた。しかし、文が急逝したことから実質的に世話人として鳥尾が会の運営を担う立場となった。この奄美史談会を再興すべく1958（昭和33）年1月17日、奄美郷土研究会の設立に至った<sup>29)</sup>。

鳥尾の分館長業務分掌には「郷土資料の蒐集整理に関すること」が特別に充てられていた<sup>30)</sup>。併せて、事業計画では「奄美郷土研究会の開催」が貸出文庫事業や読書指導と同等に位置づけられていた<sup>31)</sup>。事業の遂行にあたり、研究会の開催の目的として「奄美をあらゆる面から研究し、その真の姿の把握につとめること」、「奄美分館と奄美郷土研究会の共催とし、毎月1回研究発表の例会をもち、その成果や研究会を会報に発表すること」を据えた<sup>32)</sup>。これにより『会報』の発刊事業は、奄美分館において定期的に行われる例会の発表内容を公表する役割を担っていた。

以上から、鳥尾は業務として分館長就任期間において、例会の開催に際し講師の選定から参加

者の確保など一切を取り仕切った。加えて『会報』発刊に際する集稿、校正作業も行うなど終始裏方として事務局の仕事に専心した。また、例会においても鳥尾は発言せず聞き役に徹したという<sup>33)</sup>。

『奄美郷土研究会報』（奄美郷土研究会機関誌）

創刊：1959（昭和34）年1月

発刊頻度：鳥尾在職中は年1回（第2号は1959（昭和34）年10月、第3号は1961（昭和36）年4月、最新号（第47号）は2018（平成30）年7月）

発行所：奄美郷土研究会

印刷：鳥尾の友人である詩人・井上岩夫が担当

※第1号の奥付には井上の名前は無く“印刷やじろべ工房”と記載

編集（事務局）：奄美分館

※鳥尾は第15号（1974（昭和49）年10月）まで編集を担当

『会報』の内容は「論文」、「資料」、「会報」（例会記録として講演者、講演題目、参加者数、書簡、会員名簿（入会順）等を掲載。）で構成されており、以下の（1）（2）にみられるような様相から郷土資料の提供や参考業務を支える側面もあった。

（1）郷土関係資料リストの作成

『会報』第1号には、論文4点とともに鳥尾が編んだ「郷土関係資料リスト（戦後のもの：121点、補遺：5点）：昭和33年11月30日現在」を掲載した<sup>34)</sup>。続く第2号の「郷土関係資料リスト（2）」では、単行本・パンフレット・抜刷12点、定期刊行物11点、論文ほか計75点を掲載し内容の充実を図った<sup>35)</sup>。さらに第6号には、「郷土関係資料表（3）：新聞・雑誌発表のもの一昭35まで一（鳥尾敏雄記録）」を掲載した<sup>36)</sup>。リストに掲載された書誌事項は、鳥尾が名瀬市に本社のある新聞社『南海日日新聞』、『大島新聞』の郷土関係記事からピックアップしたものである。奄美分館では『会報』に掲載したリストを基に1969（昭和44）年7月に『奄美分館郷土資料目録』を発刊した。

（2）参考業務の可視化

鳥尾は『会報』に論文を一点も投稿しておらず、「書簡」を第13号に掲載したのみであった<sup>37)</sup>。「書簡」は参考業務の一環として、住民からの調査依頼に対する回答を可視化する意味で掲載したものと考えられる。内容は、参考業務の一環として行われた住民からの「大島に於ける平家伝説」に関する質問とその回答のやり取りを明らかにしたもので、鳥尾が調査した喜界島、奄美大島の歴史に関わる史料5点の文献が添えられた<sup>38)</sup>。

以上から、鳥尾は自ら進んで黒子となって単独で『会報』の編集にあたったと思われる。もちろん、苦勞も絶えなかったようで「鳥尾日記」には「郷研会報3号の送付先をきめる仕事住所をさがすのに思わずひまどる」との記載もある<sup>39)</sup>。長年の編集作業について第15号の「編集後記」で以下のとおり振り返っている。

「編集者として私の心掛けたことは、奄美研究の手がかりをそっと埋めておくこと（中略）方言の特異性を考慮して拗音などを小文字に表記するチェックの仕事は丹念にやっております

す。毎年一度会報編集割付の時期が廻ってくることは若干苦痛を感じつつも実はたのしみでありました。それはおそらく南島の地下水の流れをききとりつつ、初発のところでそれを編む充実感からだったのでしょう。」

出典：『会報』第15号（1974（昭和49）年10月発刊）p86

鳥尾は分館長の退任とともに第15号をもって編集担当を辞した。『会報』の発刊は、長年居住した奄美に対する恩返しといえる業務であったといえよう。井谷（2007）は、「鳥尾が一步間違えば拡散しかねない復帰後の郷土研究を繋ぎとめた」と高く評価した<sup>40</sup>。郷土研究者の結集は、『会報』の編集、発刊でなされたともいえる。その結果、『会報』に集積した学術成果の公表という位置づけで鳥尾退職の1年後の1976（昭和51）年3月、法政大学出版局から『奄美の文化：総合的研究』が発刊されるに至った。しかし、鳥尾は跋文で「研究者でない私の、研究会と会報へのかかわり方は、研究の仕事の一部を自分も担うというのではなく、ただ外がわからまとめ編むこと」<sup>41</sup>とあくまで一編集人を強調した。

分館長職の後任は、郷土史家で与論島出身の栄喜久元（さかえ・きくもと 以下、栄と記す。）が引き継ぎ『会報』の編集も担当した。しばらくは郷土研究会と奄美分館の関係は蜜月状態を保ったと考えてよい。しかし、1980（昭和55）年発刊の『会報』第20号「編集後記」に栄が以下のとおり記している<sup>42</sup>。

「本会の運営は従来県立図書館奄美分館の職員が公務の傍ら、全面的にお世話をして参ったのでありますが、（昭和）54年6月から企画運営の責任を会員に移すことに致しましたことは、さきの例会通知状（下線部引用者）でお知らせ申し上げた通りであります。」

出典：『会報』第20号（1980（昭和55）年3月発刊）p85

栄は第23号まで「編集後記」を記していた。上掲した例会通知状は未見であるが、次第に館内における業務態勢が改まったもようで『会報』に寄稿した“知識人”有志による館外での編集へと移行した。正式に館外に事務局が移っても『会報』の発刊は継続した。ちなみに、奄美郷土研究会の公式ウェブサイトは、2013（平成25）年4月付けで更新停止の「お知らせ」がアップされたままだが、奄美図書館の蔵書検索システム（OPAC）では第47号（2018（平成30）年発刊）までの所蔵が確認できる<sup>43</sup>。また、奄美郷土研究会は2013（平成25）年に『会報』第1～5号の合冊復刻版を発刊した。次いで2020（令和2）年には、第6～10号を復刻発刊した。このことから、鳥尾が編集した当時の『会報』は何ら色褪せることなく、奄美における地域メディアとして今日も各方面から注目を集めている。

#### 4. 読書会誌『島にて』

読書会について内沼（2018）は、「本ごとに単発で告知して異なるメンバーが集まる形でイベント形式のもの、固定のメンバーで連続して複数の本を読み続ける形で教室により近い形式のもの」の二つのタイプを示している<sup>44</sup>。本章で取り上げる読書会は後者に該当する。1967（昭和42）年結成の「島にて」は、参加する会員がほぼ定まったのが結成から3年後、さらに会誌である『島にて』を創刊するまでになお3年を要した。

振り返ると、鳥尾は奄美に移住して間もない1957（昭和32）年11月、自身が非常勤講師として勤務する大島高等学校の図書館で生徒とともに読書会を開催した<sup>45</sup>。「島にて」会員の亀井フミ

は「奄美日米文化会館は、文学愛好者達との集まり場所であった。石原慎太郎の「太陽の季節」が世間で反響を呼んでいた頃で、私達も、その作品に対する是非や感想等を述べ合い、討論会のような催しもあった。14, 15名ぐらいで島尾先生の司会で進められたように思う。」<sup>46)</sup>と回想している。時間の経過とともに奄美分館でも正式な文化団体として読書会を創設する機運が高まったようである。

あらためて「島尾日記」で「島にて」の創設を確認すると、結成日は1967（昭和42）年7月15日で「夕方7時から図書館二階会議室で読書会の結成会をひらいた。20名強集り、2ヶ月に一回開く事にした。」とあった<sup>47)</sup>。会員資格を厳格に求めてはおらず、上述のとおり次第に会員が固定されたと思われる。当初は「隔月に集まって、選んだ書物の読後感を語り合うだけの会」<sup>48)</sup>であったようだが、その後原則として毎月1回土曜日に例会を開催していた。

島尾は例会での課題図書を選定のうえ、「読書会の準備のために一気にそれらのものを読む仕事が課せられ、苦痛を感じながらも結果として、読書のたのしさを享受した」<sup>49)</sup>とあり、多忙な業務のなかでも読書会の活動を「将来ともこの読書会の方法はあまり変化は期待できないと思いますが、長く続かせたい」<sup>50)</sup>と定着を願っていた。

例会を重ねるなかで、島尾には「会と会員の環境を記録して置きたい気持」<sup>51)</sup>が芽生え、冊子の計画を立案するに至った。会員もまた同様に冊子の制作を希求していたことが会員の奥たずえ（以下、奥と記す。）の寄稿した『島にて』の手記で伺い知ることができる<sup>52)</sup>。

「島尾先生のもとで学んでいるこの機会に私達の文章を読んでいただきたい」という会員の声から冊子を作る方向へとすすめられた。400字詰め20枚以内、題は自由、締切日等について語られ、このとき初めて年会費一人2000円が設定された。仮の名前として『島にて1号』が先生の編集で出された。お忙しいご公務に加えて作家としてのお仕事を思うときに、このような文章を読んでくださった先生にあらためて頭の下がることである。」

出典：奥たずえ2001. 会誌「島にて」創刊号の周辺で、『島にて』第17号 p4～7

以上のような経緯から「島にて」は、島尾と当田の業務的な支援を受けながら会の規約を定め「読書に親しみ、心豊かに生きるために、読書活動を通して交流を深める場を、会報を発行する活動」<sup>53)</sup>を展開していった。

#### 『島にて』（奄美分館読書会「島にて」会誌）

創刊：1973（昭和48）年9月

発刊頻度：おおよそ年1回

編集：事務局 T こと当田（第3号から第10号まで編集を担当）

※現在は奄美図書館に事務局を設置

発行所：奄美分館 ※2021（令和3）年9月現在、最新号は第32号

小冊子である『島にて』の内容構成は、会員の作品および当年度に開催した例会に関する「活動のあゆみ」を掲載、巻末には当田による「会員入会名簿」、「会員消息」、「編集後記」を添えた。創刊号の巻頭 p1 には、島尾や当田をはじめとする9名の寄稿者の氏名が並んだ。この9名が読書会の運営にあたるなか『島にて』の寄稿者となっていく。頁が進んだところに当田は『おちつき先』という短編小説を載せており、その文才を如何なく発揮している。会員の寄稿については、奥による島尾に対する回想に拠れば「私の文章に先生が手を入れられた処はなく原文のまま活字

になっていた。先生の文学者としての表現に対するきびしさと、別の意味での優しさに触れて衿を正された思いであった。」<sup>54)</sup>とある。鳥尾が会員の創作物に対し一個の文学作品として丁寧に扱ったことが伺えるエピソードだが、号を追って注目すべき記載内容を以下に披瀝する。

#### (1) 第2号 (1975 (昭和50) 年12月発刊)

「編集後記」の記載から『会報』と同じく井上岩夫が営むやじろべ工房で印刷されていたことがわかる。この号では会員8名が寄稿しており、第1号に引き続き当田は、鳥尾の創作活動や図書館勤務にオマージュを込めて創作した『ひたぶるに鳥を見つめる鳥尾敏雄の目』を寄稿した<sup>55)</sup>。

「編集後記」で鳥尾は「題名の『鳥にて』は仮のもの（下線部引用者）でしたが、その後よりよい題名も見つからぬまま、今号もその名を用いました。（中略）今号の原稿もまたおおむね例会の常連の方々たちの執筆にかかるものですが、第1号にくらべてそれぞれの標的が定まってきた感じを持ちました。そして背後に奄美のあるいは南島の、生活がまぎれもなくかけをおとしていることが感受され、この小冊子の特色をあらわしていることになると思います。」と述懐し、「遅々とした歩みではあったが、読書会が一応の根をこの南島の一隅におろし得たこと」<sup>56)</sup>を確信しつつ、第2号の発刊前に分館長を退任し奄美を離れた。『鳥にて』という誌名は、鳥尾曰くあくまで仮のものと認識していたが、今日に至るまで誌名変更はなされていない。

#### (2) 第3号 (1976 (昭和51) 年2月発刊)

第3号から鳥尾に代わり当田が編集を担当した。「編集後記」で当田は「この会を創られそしてここまで育ててこられた鳥尾先生が指宿へ移られ、会員は柱を失って放心の状態に陥った期間があったことは否むことができない。この放心から醒めた時、誰しもの気持にこの会はずけてゆかなければいけないという使命感みたいなものがあった。（中略）今号に寄せられた作品にも、奄美のかけが一層深々とさし込んでいるようで、この小冊子を生み出す根っこみたいなものに思いを寄せざるをえない。」<sup>57)</sup>と鳥尾が去った寂寥感とともに、奄美の地に根づいた会誌をもたらしてくれたことに深く感謝の意を表した。

#### (3) 第13号 (1988 (昭和63) 年1月発刊)

鳥尾は1986 (昭和61) 年11月12日に逝去した。第13号は“故鳥尾敏雄先生追悼号”と副題を付した。目次に鳥尾のスナップ写真を掲載、本文は「追悼集」12点と会員の鳥尾を悼む文章が並んでいる。さらに第2号で掲載した当田の作品を再掲、「編集後記」をみると「当田さんはずっと読書会の世話をされておられました。が、3年ほど前体を悪くされ、自宅療養中」<sup>58)</sup>とある。追悼号の発刊にあたり、既に当田は編集から外れているが、結成当時と変わることなく奄美分館と「鳥にて」の繋がりは強固であった。

ここからは『鳥にて』の発刊における当田の関わりについて確認する。『鳥にて』の定期的な発刊は、当田の業務無くしてはありえず、編集作業は、鳥尾が離任した後の第3号から第10号まで担当した。奥は、当田が会員の入退会手続や消息確認など雑多な事務運営を担ったことで読書会の発展と『鳥にて』の発刊継続が保たれたと述べている<sup>59)</sup>。

『鳥にて』の発刊は、奄美図書館へ移行した後も歴代の館長が支えてきた。2021 (令和3) 年で第32号を数えた『鳥にて』は、“文学者としての鳥尾”を信奉する住民にとっては、かけがえのない地域メディアとして位置づけることができよう。加えて、文芸的伝統という側面からも“配る出版”を評価し得る事業と思われる。根本 (2011) は、先進的な図書館制度を有したヨー

ロッパの小国であるフィンランド、デンマーク等が優れた口承文芸の源泉を保持するなかで、図書館が発掘した民族文化を育てる場として機能したことで“民族文学揺籃の場”に成り得たと指摘した<sup>60)</sup>。すなわち、北欧の国々では図書館を自らの文化的アイデンティティを表明するに相応しい場と捉え、“郷土の文芸”に深く関与するシステムを構築したと考えられる<sup>61)</sup>。

本土に比べ記録史料の僅少な奄美でも北欧の国々と同様の独自の文化的アイデンティティが形成されており、奄美の豊穡な文化の形成過程において、出版活動を通じ島尾という作家を住民はごく身近に感じることができたのであろう。地域の図書館が“郷土の文芸”振興を図る意味においても『島にて』は今日まで微灯を絶やすことなく、発刊を維持している点は興味深い。

## 5. 考察

本稿では出版活動のうち、奄美分館における“配る出版”である定期刊行物3誌の発刊状況および掲載された記事内容を考察した。明らかになった点を刊行物ごとに以下、列挙する。

『島の根』は、島尾が住民との交流を重視し、図書館活動を実施するうえでの広報誌として創刊したものであった。島尾は編集を若手の職員に委ね、奄美の住民の意見を汲み取った誌面づくりを心掛けた。具体的には“奄美分館の歴史”を振り返りつつ、地域の読書環境の動向を公表することで、図書館サービスのさらなる周知を目的とした冊子へと定着を図った。『島の根』にみられる広報物としての“配る出版”は、それまで離島域で図書館サービスの恩恵を受けられずにいた住民に対する生涯学習機会の担保を意味した。塩見(1991)は生涯学習に関わる図書館の教育機能として資料および学習機会の提供を提示したが、なかでも文化活動の企画と機会の提供、「市民の大学」としての学習・資料センター機能の重要性を強調した<sup>62)</sup>。「島尾日記」でも奄美分館の文化活動を「図書館の市民大学のような行事にかえたいと思う。」との記載がみられる<sup>63)</sup>。よって、この学習・資料センター機能は、奄美分館の“配る出版”にも該当すると考えられる。

『会報』は、島尾が自ら育成した文化団体である奄美郷土研究会の活動の足跡を残す意味からも、今日でも地域史に関する重要な学術雑誌のひとつといえる。『会報』の編集は、島尾自身の歴史家としての素養が発揮された出版活動であり、結果として奄美の歴史探究に関わる“知識人”の学術的なコミュニティ<sup>64)</sup>を創成したといえる。

『島にて』は、図書館内の文化団体として島尾の文学熱を持って創設した「島にて」という読書会活動の発露ともいうべき文芸誌である。島尾が文学者として図書館というフィールドを活かし、奄美の文学をトピックに据え、文学を愛する住民主体の学習的なコミュニティを創成したといえる。なお、島尾は在職中に第2号の発刊までに関与したにすぎず、島尾の退職後は当田が『島にて』の編集をはじめ会の運営一式を引き継ぎ、コミュニティの維持を図った。

言い換えると『会報』や『島にて』は、新たな“場”を奄美の住民にもたらしたともいえる。豊(2015)は、戦後の奄美における図書館活動の成立経緯を辿るなかで、琉米文化会館時代からの文化行事を引き継いだ島尾の活動が、奄美の住民にとって身近な“場”をもたらし、住民の文化活動のニーズをも充たしたと評価した<sup>65)</sup>。本稿で考察した“配る出版”も同様に住民が寄稿者となり、あるいは読者となるなかで、奄美分館の業務的支援によって“場”とコミュニティを創成する契機となったといえる<sup>66)</sup>。加えて、“配る出版”は奄美の住民に向け伝達する地域メディアのひとつとして位置づけることができる。

このような“配る出版”を軌道に乗せたのは、島尾と当田の業務によるところが大きく、なかでも当田の地道な編集作業が欠かせなかった。当田は、1950年代後半から70年代にかけて司書としてその手腕を如何なく発揮したといえよう。島尾が奄美分館を去った後、当田は分館長補佐お

よび分館長心得として1982（昭和57）年の退職時まで“配る出版”に関わった。島尾と当田の業務から創刊された定期刊行物3誌は、奄美における地域メディアとしての役割を担いつつ、今日に至っている。

## おわりに

1950年代から60年代にかけては、本稿で考察した島尾や当田の業務以外にも図書館運営のなかで郷土の歴史や文芸に関わる出版活動を展開した事例が存在する<sup>67)</sup>。地方の図書館が関与した出版事情を精査するなかで、図書館文化史の研究をより深化させることを今後の課題としたい。

## 【謝辞】

本稿を草するにあたり、島尾伸三氏からのご配慮および鹿児島県立奄美図書館、かごしま近代文学館、奄美新聞社当田榮昶氏のご支援ご協力に心から感謝申し上げます。

## 【註】

- 1) 柳与志夫、田村俊作2018.『公共図書館の冒険：未来につながるヒストリー』みすず書房. p42～47
- 2) 奥泉和久2016. 論考：森博、図書館実践とその思想. 小川徹、奥泉和久、小黑浩司『人物でたどる日本の図書館の歴史』青弓社. p481
- 3) 奥泉和久2000.『市立図書館と其事業』の成立と展開.『図書館界』52巻3号 p136～137
- 4) 野原海明2017. 特集・メディアとしての図書館：図書館に編集と発信の力を！『LRG』No. 21 p6～39
- 5) 武田和也2019. 近年の公立図書館による出版活動の概要：定期刊行物を中心に.『カレントアウェアネス』No. 339 p5～10
- 6) 武田（2019）は、指宿市立図書館『文芸いぶすき』（1955年～）、薩摩川内市立図書館『文化薩摩川内』（1987年～）、鹿屋市立図書館『かのや文芸』（1998年～）、南九州市立図書館『南九州市薩南文化』（1964年～）の4例を挙げている。（西暦年～は、創刊年。）
- 7) 本稿での奄美とは、奄美市および大島郡の町村全てを含む奄美群島全域を指す。
- 8) 島尾と当田が勤務していた当時の奄美分館の業務に関する先行研究として、井谷泰彦2007.『図書館人物伝：図書館を育てた20人の功績と生涯』日外アソシエーツ. p211～232、豊浩子2015. 戦後の奄美琉米会館/県立図書館奄美分館の歴史的経緯に関する考察.『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』9号 p73～93などがある。
- 9) 工藤邦彦2017. 奄美分館兼奄美日米文化会館長・島尾敏雄の仕事：生誕100年遺された日記を読み解く.『図書館学』No. 111 p16～17
- 10) 鹿児島県立図書館1959.『南の窓』12号 p1～3
- 11) 鹿児島県立図書館1990.『鹿児島県立図書館史』p93～94
- 12) 間弘志2003a.『全記録分離期・軍政下時代の奄美復帰運動、文化運動』南方新社. p187～190
- 13) 間弘志2003b. 書庫の息吹き. 奄美分館『奄美群島日本復帰50周年記念：奄美分館所蔵日本復帰関係図書目録』p3
- 14) 前掲書12) p87
- 15) 泉芳朗は詩人として活動、同人雑誌を主宰、高村光太郎など第一線で活躍する詩人らと交流を深めた。1946（昭和21）年、鹿児島県視学となり大島支庁に異動も1949（昭和24）年辞任。その後、名瀬で出版社を創設、雑誌『自由』の発刊を引き継ぐ。奄美の日本復帰運動に関わり政治家へ転身、奄美大島日本復帰協議会議長に就任。奄美の日本復帰と振興発展に尽力した。（出典：奄美市立奄美博物館2021.『博物館が語る奄美の自然・歴史・文化』〔奄美博物館公式ガイドブック〕p93～95）
- 16) 前掲書13) p3
- 17) 金山智子2008. 離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達：奄美大島編.『ジャーナル・オブ・グ

ローバル・メディア・スタディーズ』3号 p7

- 18) 加藤晴明、寺岡伸吾2017.『奄美文化の近現代史：生成・発展の地域メディア学』南方新社. p74～83
- 19) 前掲書17) p7
- 20) 前掲書18) p38
- 21) 前掲書18) p82
- 22) 1983 (昭和58) 年11月18日「県立図書館奄美分館の歩みと将来の展望」(奄美分館事務資料) p7～8
- 23) 奄美分館2009.『島の根』(県立図書館奄美分館報)に見る奄美分館の軌跡.『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』p43～52
- 24) 奄美分館1966.『島の根』第1号 p1
- 25) 前掲書24) p4
- 26) 加藤一英1968.名瀬図書館訪問記. 奄美分館『島の根』第4号 p1
- 27) 徳桂1978.司書講習通信：別府大学から. 奄美分館『島の根』第14号 p13～14
- 28) 奄美分館1967.『島の根』第3号 p5～6
- 29) 林蘇喜男2000.『林蘇喜男雑纂Ⅲ』私家版. p20～23
- 30) 奄美分館、奄美日米文化会館1961.『一年のあゆみ：昭和35年度』p3
- 31) かごしま近代文学館蔵『島尾敏雄関係史料』「37年度事業計画」(奄美分館事務資料)による。
- 32) 前掲書31)
- 33) 松下志朗、下野敏見2002.『鹿児島島の濤と薩南諸島』(街道の日本史55) 吉川弘文館. p188
- 34) 奄美郷土研究会1959.『奄美郷土研究会報』第1号 p39～40
- 35) 奄美郷土研究会1967.『奄美郷土研究会報』第2号 p55～57
- 36) 奄美郷土研究会1969.『奄美郷土研究会報』第6号 p59～60
- 37) 奄美郷土研究会1972.『奄美郷土研究会報』第13号 p124～125
- 38) 工藤邦彦2021.昭和30年代・島尾敏雄奄美分館長における参考業務.『図書館学』No.119 p30～36
- 39) 「島尾敏雄日記(奄美図書館蔵複写)」1961(昭和36)年5月10日による。
- 40) 井谷泰彦2007.『図書館人物伝：図書館を育てた20人の功績と生涯』日外アソシエーツ. p221
- 41) 島尾敏雄1976.『奄美の文化：総合的研究』法政大学出版局. p551
- 42) 奄美郷土研究会1980.『奄美郷土研究会報』第20号 p85
- 43) 奄美郷土研究会公式サイトでの確認、および奄美図書館の蔵書検索(OPAC)での確認(2021年12月25日アクセス)。
- 44) 内沼晋太郎2018.『これからの本屋読本』NHK出版. p218～219
- 45) 「島尾敏雄日記(奄美図書館蔵複写)」1957(昭和32)年11月1日による。
- 46) 亀井フミ1988.島尾敏雄先生の御逝去を悼んで. 読書会「島にて」『島にて』13号 p18～22
- 47) 「島尾敏雄日記(奄美図書館蔵複写)」1967(昭和42)年7月15日による。
- 48) 読書会「島にて」1973.『島にて』第1号 p29
- 49) 前掲書48) p29
- 50) 前掲書48) p29
- 51) 前掲書48) p29
- 52) 奥たずえ2001.会誌「島にて」創刊号の周辺で. 読書会「島にて」『島にて』第17号 p4～7
- 53) 読書会「島にて」2018.『島にて』第29号 p83～84
- 54) 前掲書52) p5
- 55) 読書会「島にて」1975.『島にて』第2号 p22～27
- 56) 前掲書55) p27
- 57) 読書会「島にて」1976.『島にて』第3号 p30
- 58) 読書会「島にて」1988.『島にて』第13号 p38
- 59) 前掲書52) p6
- 60) 根本彰2011.『理想の図書館とは何か：知の公共性をめぐって』ミネルヴァ書房. p29
- 61) 前掲書60) p29
- 62) 塩見昇1991.学習社会における図書館：図書館の教育機能.『教育学論集』20号 p13
- 63) 「島尾敏雄日記(奄美図書館蔵複写)」1967(昭和42)年12月23日による。

- 64) ここでのコミュニティとは、永田（2021）のいう「人々が属し、かつ構成員の間に連帯や助け合いの意識がはたらくような集団」を指す。（引用：永田春樹2021.『公共図書館を育てる』青弓社. p80）
- 65) 豊浩子2015. 戦後の奄美文化会館/県立図書館奄美分館の歴史的経緯に関する考察. 生涯学習・社会教育研究ジャーナル9号 p73～93
- 66) 野原（2017）、武田（2019）からも同様の指摘が読み取れる。
- 67) 事例として、高知市民図書館の館長職にあった渡辺進と関根善二による出版事業（オーテピア高知図書館2019.『高知市民図書館70年史』第2版 p36）および宮崎県立図書館において作家でもあった館長の中村地平や日高一、副館長の黒木淳吉らの文芸誌編集事業など（宮崎県立図書館2003.『100年のあゆみ：宮崎県立図書館100周年記念誌』 p34～38）が挙げられる。